



小さくら団子

陸奥の遠近観

特11
142
田春波
藤市太郎
脚色

264
612

088855-000-1

特11-142

小さくら団子

藤田 春波
伊藤 市太郎 / 著

M43

DBK-0038



571
142

(一) 子園らくさ小

子園らくさ小

催主報日奥陸
功成子園櫻小祝

瀬荒廓旭森青

樓明開

番三〇四話電

小	美	花	高	やまこ
錦	靜	里	助	
三	千	清	松	
勝	早	糸	助	

小さくら園子

序幕

高輪台町全權大使
菱田繁成宅かるた會

- 一 女中おまさ
- 一 夫人榮子
- 一 植木屋作造
- 一 法科大學生 磯部清一郎
- 一 全およね
- 一 小問使お光
- 一 法科大學生 菱田繁雄
- 一 醫科大學生 菱田期
- 一 徳谷盛之助

塲面全權大使菱田氏奥庭先の邸 下手依り四阿家あり
明き女中二人板附にて

女中まさき「一寸およねさん此様に多忙しいので折角待つて居たお正月も有難くな
いねい……」

明治
43.12.28
國慶

「でも今の中は致方ありませんわ奉公人ですものよ、奥様は宜い方ですから近い内休まして被下でせうから、お休みのとき好きな芝居でも見に行ませうよ」

「一寸お芝居で思ひ出したが宗十郎は好い男ねー」

「宗十郎つて言ひば書記官の須木さんねー彼の人宗十郎ソツくりよ」

「ほんとうに好い男ねー大層奥様がおひいきよ。だから日那様の御立、御出生をなすつたんですよ」

「なんだか、そう言ひば奥様の御様子か變だよ」

「およしよ、聞かれると悪いよ」

（五前後を見廻す之れにて下手より植木や作造登場）

「一寸御伺しますが表の方から御伺しましたら大層お取込の御様子ですが御年始旁々一寸奥様に御禮に伺ひました女中の光の親父で御座いますが、お取込を願はれますまいか」

「ハイ、お光さんのお父さんですか、一寸お待被下まし今かるたの最中で」

「ハイ奥様か御多忙し、懺なら、光に一寸と御傳ひを願ひます」

「ハイ」

（二人退場）

「ナンテイ有難い事たか光も今の女中様の様な身成をして居るだローが奉公さすにも此様な立派な御屋敷にさして置けば間違ひがない、わし等の様なものにも女中様も丁寧な物の言様ソレに附けても奥様の御用事と言ふのはぎんな事だろー」

（之れにて上手より夫人、朱子登場）

「ヲヤ作造さんか、大層お待たせしましたねー」

「ハイ、これは奥様御多忙の所を誠に御邪魔をいたします」

「トシデモナイ事だ、わさく呼んだのだから、サア、御掛け」

（之れにて作造下手、夫人上手になり、阿家の椅子につく）

「ハイ御奥様明けてまして御目出度ふ御座います、元日に御伺申しましたが馬車や人力が澤山有りますので台所一寸光にお伺した事だけ申して参りましたが今また御手紙で御座いまして彼やつて娘が一方ならぬ御世話になつて居りますので、其内御機嫌伺ひに上らーと思つて居りましたので誠に御申辭も御座ま

せんで實は誠に手前勝手な事で御座います、遂此頃また得意先の用事も御座
いまして自分にかまっています御座りませんで」

榮「イヤ、ソナ事で腹を立て、呼んだのではない、實は御前をよろばせよ
うと思つて迎いに上げたのよ」

作「ハイでは御腹立ては御座りませんで」

夫人「イ、エ、ソナ事は何んとも思つて居ませんが實はお前の娘のお光だね」

作「ハイ、お光は悪い事でもしましたか」

夫人「ソウ早呑込では困るが實は斯ふ言ふ譯だ、お前の娘が屋敷に来てからは誠
に行儀もよし夫れにお前か子供から育てかよいと見ひて讀み書きも達者、ソレ
にお前を前に置いてこんな事を言ふのも可笑しいかお前に似合ないよい纏
だ、處て私の子供の繁雄だね、アレが大層へ行つてますので御友人の學生
さんか大勢御遊びに御出になる中で濱町で御前さん御存かい、磯部銀行と言ふ
銀行が有りませう」

作「ハイハイ、存て居ます大層な金満家て御宅か銀行をやつて御出になるそつで」

夫人「ソノ銀行の頭取さんの若旦那て清一郎さんと言ふ御方が大層お光を氣に入

つて若い内は有り勝てね、私し等の知らない内に話しが出来たと見ひて、ド
ツチモ戀つて居る様なのだ」

作「ハイお光の奴かマアトンドモない奥様の目を忍んで太ひ事して居ますので」

夫人「イヤ、そつぢやない、まだそんなみたらな事はありませんが此の間精一郎
さんから指環を戴いたのそれでね私しも人の娘を預つて居つて間違てもあつて
は悪いと思つてだん／＼調べて見るに精一郎さんはせひ妻に貰ひたいとお仰る
それで磯部様の奥様にも話し旦那様にも相談したら兎に角忤かそんなに望んで
居るならお光に逢ふと御仰てお光を御覽になると大層旦那様や奥様がお光を氣
に入つて是非にと云ふ事になつて私しか仮親になつて先き様も御身分が有る事
だから嫁人させ、御前も不承知はなかると思つて私し丈は勝手だが、マア
極めて居る様な譯たがお前ドツたね」

作「へー(呆れ顔)ぢや磯部様の若旦那様がお光のへーソウで御座ますか、ハイハ

イ私しはアレマー有難過ぎて御禮の中上様も有りませんで、何分よろしく」

夫人「ぢやお前御承知かい」

作「ハイ、承知處の騒ぎで御座りませんで、何分よろしく」

夫人「ソレテ結構ちや恰度精一郎さんも今晚かるた會で御出になつて居るから一寸逢つて行つたら」

作「ハイ、デモコンナ身成で御座いますから、ヘツまたこの内にでも、ハイハイ」

精一郎「この時上手奥より精一郎お光登場」

光「トウもお光さん、あんたは上手だ我々顔色なした」

精「私しか上手なのではないんですの、あなたが御一處だから勝ちましたよ」

光「ウマク言ふぞ、タカ光さんが僕の組になつた時徳谷の奴、嫌に不平の面をして居つたよ」

作「アラ嫌だワ、わたし彼の人(と言ひながら一寸顔を上げて)アラ奥様が」

光「父さん」

夫人「ヲヤ磯部さん、御夫婦連れて御樂しみたねー」

精「ハイ奥様の御許しか出ましたのでハ……、奥様此の方は」

夫人「アー御引合しますが、此人は御光さんの御父さんで作造さんと仰る方よ」

精「ハア之れはソウデすか、僕のためには遠からず御父さんになる人ですな、

作「却て恐入りますで」

光「お光さん、御案内して貰ふかねー、色々話しか有るで」

夫人「ハイでは御父様此方へ、御奥様御免遊せ」

作「却て恐入りますで」

光「お光さん、御案内して貰ふかねー、色々話しか有るで」

夫人「ハイでは御父様此方へ、御奥様御免遊せ」

作「却て恐入りますで」

光「お光さん、御案内して貰ふかねー、色々話しか有るで」

夫人「ハイでは御父様此方へ、御奥様御免遊せ」

作「却て恐入りますで」

光「お光さん、御案内して貰ふかねー、色々話しか有るで」

夫人「ハイでは御父様此方へ、御奥様御免遊せ」

作「却て恐入りますで」

光「お光さん、御案内して貰ふかねー、色々話しか有るで」

夫人「ハイでは御父様此方へ、御奥様御免遊せ」

作「却て恐入りますで」

光「お光さん、御案内して貰ふかねー、色々話しか有るで」

夫人「ハイでは御父様此方へ、御奥様御免遊せ」

作「却て恐入りますで」

光「お光さん、御案内して貰ふかねー、色々話しか有るで」

夫人「ハイでは御父様此方へ、御奥様御免遊せ」

作「却て恐入りますで」

光「お光さん、御案内して貰ふかねー、色々話しか有るで」

夫人「ハイでは御父様此方へ、御奥様御免遊せ」

作「却て恐入りますで」

光「お光さん、御案内して貰ふかねー、色々話しか有るで」

夫人「ハイでは御父様此方へ、御奥様御免遊せ」

作「却て恐入りますで」

光「お光さん、御案内して貰ふかねー、色々話しか有るで」

夫人「ハイでは御父様此方へ、御奥様御免遊せ」

作「却て恐入りますで」

イヤ始めまして僕は磯部精一郎であります」

作「ハイハイ、私しはお光の父で作造と申しますが、只今奥様から有難い御言葉

で何んにも早や御禮の申様も御座いません」

精「ハ、ア御奥様から御聞きしたか、とんだ御迷惑でせうが光さん茲處で御話

も出来ません、始めて御目に掛つたのですから何處か御座敷を拜借しまして」

夫人「ハイ何處でもお自由に」

作「却て恐入りますで」

精「お光さん、御案内して貰ふかねー、色々話しか有るで」

光「ハイでは御父様此方へ、御奥様御免遊せ」

作「却て恐入りますで」

夫人「一人になる上手奥より須木登場」

須「奥様此方ですか方々尋ねました」

夫人「ヲヤ須木さんマア御掛けなさいマアホントウ氣をもませますね」

須「奥様誰れも来ませんか」

夫人「大丈夫ですよ奥はかるたで夢中ですから」

須「時に奥さん役所で聞くに今度御前は全權公使で佛國へ御出になる様な御内命を聞きましたが貴女御聞きになりませんか」

夫人「昨夜ソの事を申しましてねー旦那計り御出になるならば大層御都合の宜い事と思つて居ましたら、私しも全行だと思ひましたのでホントウに困つて仕舞つたのですよ、行けば貴方に逢ひません、ねーホントウドウシタラヨイでせうと思ふと心配でねー」

須「ソノ事ですよ、僕も奥さんと御別れするのがつらいので、ドウデせう彼國へ僕も御供願はれる様御前に夫人様から御話しをウマク願つて被下、ソウスレバ外國へ行つても御互に御前に丈知れなければ外國人計りですから結局日本に居るより他に氣兼ねなくつて結構だるうと思ひますかねー」

夫人「ソウチー御前は私しと言ひばドウでもなるから、ではソウ言ふ事にしませう」

須「毎度で済まんですか少し許り、何にせ薄給ですから」

夫人「悪ひ處へ使ふと承知しませんよ」

須「金を渡す、五十圓貰つて女中にも見附かると思ひますから、之れて失禮します」

須「時に奥さん役所で聞くに今度御前は全權公使で佛國へ御出になる様な御内命を聞きましたが貴女御聞きになりませんか」

夫人「昨夜ソの事を申しましてねー旦那計り御出になるならば大層御都合の宜い事と思つて居ましたら、私しも全行だに聞きましたのでホントウに困つて仕舞つたのですよ、行けば貴方に逢ひませんー、ねーホントウドウシタラヨイでせうと思ふに心配でねー」

須「ソノ事ですよ、僕も奥さんと御別れするのがつらいので、ドウデせう彼國へ僕も御供願はれる様御前に夫人様から御話しをウマク願つて被下、ソウスレバ外國へ行つても御互に御前に丈け知れなければ外國人計りですから結局日本に居るより他に氣兼ねなくつて結構だらうと思ひますかねー」

夫人「ソウテ御前は私しが言ひばドウでもなるから、ではソウ言ふ事にしませう」

須「一度で済みますか少し許り、何にせ薄給ですから」

夫人「悪ひ處へ使ふと承知しませんよ」と金を渡す、五十圓貫つて

須「女中にも見附かると悪いですから、之れて失禮します」

紙問屋

仁壽生命保險會社
青森代理店

外野紙店

電話五六

牛豚肉鶏卵親
卸小賣商 玉

陸海軍御用達

改良舎

電話五七

海陸
運送業

新安方町

運送店

電話五八
電話(〇六)(二)

小 さ く ら 園 子

○外科、梅毒、皮膚病

○泌尿器科 特に淋毒性尿道
膀胱子宮該病

(入院隨意)

上薪町(郵便局前)

山口外科醫院

院長 山口金徳

電話 三三七

○内 外 科

梅毒、痔疾、皮膚病

柳町(伊藤文方)

則天堂 葛西恒一

小 さ く ら 園 子

紙問屋

仁壽生命保險會社
青森代理店

針野紙店

電話五六

牛豚肉鶏卵親
卸小賣商 玉

陸海軍御用達

改良舎

電話五七

海陸送業

新安方町

⊕ 運送店

電話五八
電報(01)(二)

○外科 梅毒、皮膚病

上新町(郵便局前)

山口外科醫院

院長 山口金徳

電話 三三七

○泌尿器科 特に淋病、性尿道、膀胱、子宮、該病

(入院随意)

○内 外 科

柳町(伊藤文方)

梅毒、痔疾、皮膚病

則天堂 葛西恒一

和洋酒 鐘詰味噌
醬油 煙草 氷 卸商

北原支店

新安方町

村田商店

電話 三三七

理髮師

濱町四丁目

船水久一

流行に後れざると裁縫の
精巧なるは弊店の特色也

大町

竹屋洋服店

電話 九三

弊店は多くの顧客を得て而して之れ
に適當の注意を拂ふ能はざるより弊
る小敷の寵顧を得て之れに周到の注
意を拂ふことを欲するものなり

品質の善良と

信用ある金光堂



金屏風 額面類 各種

西洋家具一式 日本家具一式

唐木細工種々 毛布座布團類

室内裝飾品 其他雜貨品

幣店は御賣と同値なり

東京金光堂支店

安方町五丁目

金光堂

和洋酒罐詰味噌
醤油煙草氷 卸商

北原支店

新安方町

村田商店

電話三三七

流行に後れざると裁縫の
精巧なるは弊店の特色也

大町

竹屋洋服店

電話九番

理髮師

濱町四丁目

船水久一

弊店は多くの顧客を得て而して之れ
に適當の注意を拂ふ能はざるより寧ろ
少数の寵顧を得て之れに周到の注
意を拂ふことを欲するものなり

品質の善良と信用ある金光堂



金屏風 額面類 各種
西洋家具一式 日本家具一式
唐木細工種々 毛布座布團類
室内裝飾品 其他雜貨品
幣店は御賣と同値なり

東京金光堂支店

安方町五丁目

金光堂

(上手下手に退場)

(風音にて下手奥より徳谷登壇)

徳「叔母さんが須木書記官とウマク遣つて居るな、叔父さん計り宜い二本棒だ……」
……二本棒と言ひばお光をドウしても手に入れんければならんが、ソウだ叔母さんの弱点を利用して……フム(木)

(二) 小 さ く ら 園 子

返 貳 幕 菱 田 繁 雄 部 屋
し 召 使 お 光 居 間

一 菱 田 繁 雄
一 お み つ
一 女 中 お ま き
一 大 學 生 大 谷
一 德 谷 盛 之 助
一 磯 部 清 一 郎
一 大 學 生 永 田

此處菱田令息繁雄部屋の体、女中お牧方附ながら幕開く、上手より繁雄外大學生
大谷永田登場

繁マ一入り給ひ、オイ牧御母様は何處へ行かれたね」

牧「ハイ磯部様の御誘ひで新富座へ御越しで御座ひます」

繁「フム、ソーカ大分此頃は磯部君の媒介以來仲宜しにられたね！、オイ御馳

走を持つて来い」(牧退場)

大谷「ナンダ、磯部の媒介とは」

永田「清一郎君が妻でも持つと言ふ譯か」

繁「アー君ア知らんで居つたか、僕の處に居るお光な」

大谷「アノ、レデーか」

永田「アレが何處へ極まつたのか」

繁「僕の母の媒介で磯部清一郎君の妻君と極つた譯さ」

大谷「オヤ、永田君の落膽如何計りだ、御察しするねー」

永田「失敬な、此奴自分の意志を以て人を推定し居るな」

大谷「然し磯部のイン福羨む可しだハ……」

(磯部清一郎上手より登場)

磯「イヤ失敬、一寸光さんと話して居つたものだから」

大谷「頗る圓滿な者だねー」

永田「實に羨望に堪んさ、大いに奢る可しだねー」

繁「三番ツかね、大分嬉ける様だねー」

三人「ハ……」

磯「なんだ馬鹿くしい、イヤ時に繁雄君、今向ふから來る奴徳谷君の嫌と思つ

たがねー」

繁「徳谷、彼奴ドーモ嫌な奴だ、母様の甥で僕のためには従弟關係が有るから交

際して居るが、僕理想に逢はん」

大「イヤ醫科の徳谷か仲々話せるぞ」

永「仲々面白い才子だよ」

磯「淡白な愉快な人物だねー」

「イヤマー交際して見給ひ」

(此時上手より徳谷登場)

徳「イヤ御揃で、ドウシタナ大分計畫ても有り想た子、一ツ僕も入れて呉れたま

いマサか醫科と法科の區別はあつても、全校の校友だハ、ハ、ハ、ハ」

磯「マー入りたまい、奥様が不在なので一ツ盛んに遣ろーと言んだ」

徳「叔母さんか留守だ……ソレハ困つたな」

繁「ナニか用が、マー晩に歸るからユツクリやるさ」

大「未來の醫學士、一とつ大に今日は磯部君に奢らせるよ」

永「マー愉快にやローよ、鬼の留守の何にかつて子ー」

して思入にて廻る

お 光 の 部 屋

(お光驚れて寝て居る處へ徳谷出づ)

徳「どうした大分悪いか、トンダ失禮したねー(あたり見廻す)

光「ハイ有難う御座い升、頂きません、御酒をたべましたので頭が割れる様で、

徳「ハ、心配ないよ、さア之を御食り」

(湯呑に薬をたらしあたり見まわしお光に渡し)

(お光之れを口の邊に持つて行くウムと氣絶す)

(徳谷あたり見廻し屏風を廻し自分も中に入る) (木)

子 團 ら く さ 小

{ 館旅定指院道鐵 }

館旅鳴中

番 七 二 話 電

{ 館旅定指院道鐵 }

館旅やぎか

番 六 三 話 電

子 團 ら く さ 小 (天)

して思人にて廻る)

お 光 の 部 屋

(お光驚れて寝て居る處へ徳谷出づ)

徳「どうした大分悪いか、トンダ失禮したねー(あたり見廻す)

光「ハイ有難う御座い升、頂きません、御酒をたべましたので頭が割れる様でい

徳「ハ、心配ないよ、さア之を御食り」

(湯呑に藥をたらしあたり見まわしお光に渡し)

(お光之れを口の邊に持つて行くウムと氣絶す)

(徳谷あたり見廻し屏風を廻し自分も中に入る) (木)

子 團 ち く さ 小

鐵道院指定制旅館



鹽谷本店

濱 町 二 丁
電 話 五 四 番



鹽谷支店

新 安 方 町
電 話 五 五 番



鹽谷旅館

小坂支店

子 團 ち く さ 小

鐵道院
海陸
聯絡
待合所

主任
梅本惣次郎

電話六四

下^ひた^や

濱町橋通り

工藤勝太郎

米雜穀問屋

米商

中村末吉

電話五三三

朝古物商
 日古着
 座疊建費
 主泉熊藏

- 三まぐ 植木屋作造宅
- 一 植木屋作造
 - 一 刑事田口
 - 一 周旋婆々お兼
 - 一 長屋者大ぜい
- 一 女房お元
- 一 山お口
- 一 某光元

明き植木屋作造、女房お元板附にて幕明く

作「ナーお元宜い事の裏には悪い事か有ると言ふからあきらめるさ」

お元「ホントウニ馬鹿くしい丸て夢見た様だねー、磯部さんの奥さんにお光か
 成つたなら今時分はぎんな樂か出来たかすれなかつたと思ふと口惜くつてく
 仕様かない」

作「今更そんな事言つたつて仕様かないがマー諦めて此子供でも育て上るさ」

お元「お光か今日は周旋屋へ行つたか夫れも之れも子供を育てなければならぬ
 のだから仕方がないさ」

作「マーマー仕様かない、アンナ身体になつて仕舞つては逆も堅氣な家へ嫁入は

出来ないので、本人の氣まゝに仕様がドウモ不思議でならないよ」

元「ホンニ相手の分らないなんて事の有るもんでないに近處の人の噂さ聞かさい
心苦しく思ふのよ」

作「おら一殊に依つたらレコ(親指を出す)でないかと思ふんだが」

元「でもマサカソンの事が有るまいよ、ナンボナンテも旦那ならお光がソウ言ふ
だろーよ」

作「マーお光か歸つて来るたらーから來たら何ふか片か附きたらーから奥の方の
仕末でもして置け」

(二人奥へ入る)
(長屋者二人井戸端に來る)

(一人一人、三人といふて段々集りてお光の噂はなし、其内刑事田口立聞き長
屋者這入る)

田口「ナンタ今聞ひて居れば亭主かなくて子供か出來て相手か分らんと言ふがこ
れは一トツ面白ひ事件だナ」

(作造の表を見て此處たどの思入り有つて)

田「御免、一寸御伺するが作造さんとお仰るは」

作(奥より)「ハイ誰方です」

(出て來る)

田口(名刺を出す)

(作造讀めぬ)

田口「警視廳の刑事」と言ふ

(作造驚く、田口上つて)

田口「外ではないが貴郎の娘さんにお光さんと言はれる方が有りますか」

作「ハイ、私しの娘で御座ひますが何にか御用は」

田口「フム、貴方の娘が子供が出來たソウダガ其子供の親か分らんと言ふソウだ
實際か」

作「ハイ分りマセン、ソウデスカ、マコトニ不思議で」

(此時お光登場)

お光「お父さん只今貴方お出なさいまし」と田口刑事を見て怪しの思ひ

田口「ア、此のお方はお光さんですか」

作「ハイハイ、コレお光、此の御方は探偵様たつてお前に聞く事が有るつて事た話したらよかる」

お光「おやソウで御座いますか、何んな御用で御座いますか」

田口「外ぢやないが、あんたの児供さんを持たれた相手が不明たと言ふ話してありますかきんな事情か捨て置かれん事で其模様をお話しを願たいてす」

お光「ハイ、マコトにお耻かしい次第でございますが、實はお願しても一とつお調べを願たいと思つて居りました様の次第でございます」

作「日那様に宜敷申上てお願するだ、此の子のためにもなる」

田口「ドウカ隠さず聞かして被下」

お光「ドウカお聞きを願ます、實は私は昨年夏に高輪台町の菱田全權大使様のお屋敷に奉公に一つて居りました、其の内お屋敷の若様の友達で磯部様とお言仰るお方へ奥様のお世話様で嫁入する事に極まりまして、磯部様が大學を卒業の間お待ち申す事と極まりました處が、二月に日那様が佛國へ公使になつてお出になる事になり、一先つ内祝言と言ふ事になりました時、なんとなく身体の工合が悪く、醫者に見て貰ふと身持た言はれまして始めて驚きましたので、實

際男になど合つた事もなし、昔し夢を見て身持になつたと言ふ様な話も聞いた事が有りますか、まさかそんな事も有るまいと思ふと思ふで、夫れからそんな事が有つては奥様は磯部様に申譯がないと夫れ切り磯部様の方は破談になるお屋敷は不首尾で下る、兎に角家へ戻つて生み落した子供が是れてございますあんまり不思議で丸で人様にお話しの出来ない様な始末でございます、就てはドウせ堅氣な處へ嫁入りが出来ずと言つて、昔から亭主がなくて子の出来る道理も有りませんので、亭主の識れる迄何處かへ奉公して子供を里子にても遣らうと此間から相談して今日漸く八王子へ奉公に出る事に極まりました様な譯で決して嘘偽ではございません、其亭主否や此子の親は私しのためには仇………と夫れも思ひますので、何卒お上のお力で知れるものとせば一日も早く知りたと思ひますのでございませす」

田口「イヤ之れは實に意外の話しを聞くもので、丸て昔の辨慶上使の芝居よりも妙たハ、ハ、ハ、イヤ大に研究す可き事件た、何れ探偵の上報告仕様」

作「ハイ、何卒何分共よろしく願ます」

お光「知れましたら何卒お知らせ願ます」

山口「イヤトンダ失禮をしました。之れて失禮いたします」
(刑事下手へ退る)

作「時にお光や、話しはウマク極まつたか」

お光「アイお父さん、八王子に藝妓に行く事に極まつたのさ、お金は別に澤山入用でないのて五十圓丈借りる事にしましたから、毎月向ふて働いで十圓位つ、送る様にしますから子供丈ドツツ頼みます」

おもと「ヲヤ、大層早く極まつたね」

おみつ「丁度宜い工合に口が有つて早速極まりましたのよ」

おもと「ソウシテ何時立つのかい」

お光「アの今日、今に迎ひに来て呉れて一所に立つのです」

お元「ヲや今日かい、あんまり急だね」

作「ナンタ大層急しいもんな、いろく仕度も有るべきに」
お光「却て早い方が宜いの、近所の人の噂聞くのが嫌だね」
お元「ソレモソウタ、ドーセ行くんたから」
作「チャ手廻りても片附て仕度して置たらよかんべー、元や何にか氣を付けて見

て遣れよ」
元「ハイハイ」

(之れにてお元また遣入る) (周旋屋の婆に山口の出)

婆「ハイ御免なさい、お光さんの御宅はこちら」

お光「ヲヤ御母さんサア、御上りなすつて被下」
(作とお元アイサツヨロシク)

婆「ナニ奉公たつてお光さんなどは藝が有つて行くんたものナンデもないよ」

山口「五十や六十の借金は直く返せるから心配なくやるさ」

元「始めての事ですから何分よろしく願います」

婆「話しわ極まりや金は山口さんお渡被下」

山口「ハイ之れに金は五十圓持つて来ましたが、私し等が二割の世話料を買ひますので四十圓丈けお渡しをいたしますか、証文はいろく途中の流車賃だの料理屋へ面出したなぞと皆向ふて持つて八十圓程かゝりますので、八十圓の証文に願います」

作「何分よろしくお光夫れてよいのかい」

お光「先程お母さんにお聞き申した様なら」
婆「間違はないよ、人様ベテンにかける様な事なら東京の真中に看板かけて人の世話は出来ませんのよ」
山口「ご心配は入りません、間違が有つたら私共が責任を負ひますから」
作「ハイハイ」

(これにお光父子判を押し四拾圓受取る) (山口婆ウマク行つた思入りある)

婆「チャ瀛車に後れない様に直ぐ行きませう」

山口「八王子たつて直ぐソコた何時でも来られるはず」

作「お光チャ身体を大切に暮せ」

元「友入と喧嘩などするてないたぞ」

お光「ハイジヤお父さんお母さん随分ご丈夫で坊を頼みます」

作「ヲヤ此奴め何にも知らずに懐に寝て居るは、ソーラ〜お母が行くんだ逢つて遣れと懐の兒を見せる」

元「よく見て行つて呉れ」

お光「ナーニ此兒も仇の未だわねー」

(戸をやる泣き上る) (木)

大町四丁目

貴金屬
細工司 商 鈴木忠之助
眼鏡

電話四〇〇
電器スエ

新町一念坊角

成

田

理

髪

店

新機自轉車

貸自轉車及修繕
毛皮首卷澤山入荷

米町二丁目角

水野商店

電話六二五

主人「ナニを言つて居やがるんだい。いくら縁起をかついても仕様がないやか

元なんぞ茶計り挽いてやがら」

おかみ「だからさドウツ少し縁起でも付けて頂戴よ」

主人「ナニをめんごうな(料理屋主人登場)

おかみ「お早ふ大分朝から陸ましの、若い藝妓に見せたら騒動だよ」

主人「マア親方マア早い事、ドウも昨晩は有難ふ」

おかみ「マア御一ツくドウデス此頃は」

主人「イヤハヤお話になりませんよ、來月は少し宜いたろーと思つてますがねー」

おかみ「來月くテ子、何時になりやヨインだか(一同ハハ)」

主人「時に相談たか内の小元さんだねー、ドウダイ今少し何んどかしたら、來た時は八王子はヒツクリ返る様な全盛だつたか此節はサツバリダローヂヤナイカ」

おかみ「ソレテスよアの子もあんまり頑固過ぎるんでねー」

主人「なんでも當節はアレデは駄目だよ、松のや丸子なんそはあの顔で今月も一番賣高たよ、内の小元なんぞもいろく御客棧から話しか有るんだから話しをするを少しや藝者ですよとはねつけるんだからねー當節は夫れ計りではだめたよ少し氣を附けりや目の廻る丈け賣れるんだからねー當節は夫れ計りではだめたよ」

おかみ「今日子實は小元に話しを仕様と思つて居たのよ、今委し小元に話すから主人「ア」」

小元「おかみ小元くを呼ぶ、お光登場」

おかみ「オ、小元少し言つて聞かせる事が有るから此方へお出で、外でもないが何時もお前に話して聞かせる通りだ、お前が始め大邊多忙しかつたのに此頃の暇はなんだねー、私の家ぢや大金出して遊ばせて置いためでないんだよ、御茶引く譯は御前の胸に分つて居るたる、八王子のお客ばかりでなく東京のお客たつてポコく三味線で金切聲の調子パツレの謠を聞ひて、金を撒いて喜ぶ奴が有るかねー、お客が藝者を呼ぶと言ふのは外に望みが有るんだよ、お前の様に藝者は藝の外賣る者が有りませんなんて言つて、お客様の思召に隨はないからお茶引なんだ、私の處でコソ一枚鑑札だが外では皆一枚鑑札だよ、之れか

らお前が剛情を張るなら二枚鑑札願つて、否應なし稼がすからソウ思つてお出
 て、ソレがイヤナラ金に利子を拂つてお出で、今デモ自由にしてあけるから」
 お光「ソウ仰しやいますが一枚鑑札は嫌です、私娼妓に身を賣つたのでは有りま
 せん」
 おかみ「厭ならイヤでよいよ、主人の言ふ事を聞かない様な奴は置けないから金
 を返して外へ往つてお呉れ」
 お光「ハイ娼妓の勤は私しには出来ませんから、ナニニ五拾圓計りの多寡の知れ
 た金、ハイ屹度返します」
 おかみ「お金を返す生意氣な、多寡の知れた五拾圓だ、オイ戯談言ふなお前の處
 は正金で八拾圓、夫れから此方へ来て百圓の上になつて居るよ」
 お光「エツ、私は五拾圓より借りた賃ひは有りません」
 主人「オイお光巫戯た事を言ふな、私の手から八拾圓出したぜ、証文が有るぢ
 やないか、証文が口を利くのだ、其の心算で物を言ふがよいぞ」
 お光「エ、ソレではお兼婆さんと山口にだまされたのだ」
 おかみ「ナンでもヨイよ早く返せ」
 主人「生意氣な、手前等に借金を踏まれてたまるか、早く返せ生意氣な」(ト
 煙草をなぐる)

(千代吉の出)

千代吉「マーマーおかみさん、旦那さんなんです、朝から見共ない小元さんと
 なんてすね、マー旦那、おかみさん私しにまかしてお呉んなさいな、奉公人は
 奉公人同志と言ひますからさ」
 主人「生意氣な畜生打たき殺そうと思つたが」
 おかみ「ホントウに剛情なアマアだからね」
 (千代吉に目で知らして二人退場)
 千代「ドウしたんです、ホントウにあぶない」
 お光「姉さんごうも濟みません、御心配を掛けまして私あんまり口惜しくつて」
 千代「道理だよあんな事を言はれては、なんば丸抱でも腹は立つがね、併しね斯
 んな稼業に身を沈めたら仕方が有りませんよ、好き好んで体を汚したくはない
 が夫れをせぬと三日と勤まらないんだから之れもみんな親や子のため、諦め
 るより外ありませんよ、またお客だつてソレ嫌な人計りでも有りませんよ、中
 には金の有る立派な人が親切にされたら、随分嬉しい事も有るよ、氏なくして
 玉の輿の例も有るから辛捧するさ、ねー小元さん」
 お光「姉さんよく分かりました」
 (之れにて料理番頭登場)

番「福本です、今日は小元姉さんお座敷よ」
千代「オヤ有難うお客様誰れ加藤さんでなくつて」
番「へエ」

千代「只今直ぐ御苦勞様よ」

番「さ様なら」(退場)
お光「ヲヤ加藤さんて若旦那だとか御仰るあの方」
(千代耳にボンヤク)

お光「エツマー」(木)

福本樓座敷

加藤「仙公外大せい板附にてあく」

加「ヲイ皆澤山お上り先達のお前等が勉強して呉れた御蔭で大逡利益つたから」
仙「ハ、サア踊らうぜ」

お玉「一寸おつきしあり」

加藤「只今小元さんか直に來ますとさ」
「ソウカ早く呼べ」(目見て知らして金をつかませる)

(一同這入る皆退場加藤一人て思入有つて寝る)
(今晚はと蔭で聲をかけて小元登場)

小元「ヲヤ旦那お休みドウも後くなつて済みません、御氣分ても悪ひの寝つては御毒ですわ」

小元「(小元起す手を握つて起る小元振り放す)」
「お戲談なすちや嫌ですよ、お酒を召し上げ」

加「何、酒飲ッウムお前が勧める酒なら何杯でも飲むして呉れ、ヲイ小元私の言ふ事何時も戯談として居るが今夜こそ野暮は言はないで聽いて呉れ、此土地へ來て弘めをした當時より思ひ込んで居るんだよ、お前たつてそんなチンチぢやあるまいさ」(と手を取る)

小元「旦那ホントウに私を可愛かつてお呉れなさいますか」
加「ナンデ嘘を言ふか、お前が承知なら主人の借金を奇麗に返して償業させ父や親戚に承諾して貰つて立派にする」

小元「有難うございます、實は兩親と一人の子供、エイ弟があるのでございます其三人は私しか後にはなければならぬので、夫れてございますので此のやうな勤に出たのでございます」

加「ウム、ソウカ親子三人位なんてもない、決して心配するな、安心して今夜は泊つて行け」

小元「イヤそれはいけません、私しそんな案な事は嫌でございます、若旦那が

ホントウにそうして被下なら佐野やの借金を極めて家の父に承知してお嫁入さしてからにして下さい、そうでないに藝者が此ま、乗込ましては私しは兎に角若旦那さまの御身分にか、はりませうと思ひまして」

加「オイ小元お前は全く不馴れたと思つたら巧者なものだな、しかし今夜はドウ有つても私と遊んで行く譯に出来ぬか」

小元「可今も申す通り立派に話をつけて下被た上てなければ……」

加「フム、そうかそれでは、お前とけて見せて締つて居るんだな……野暮を言はずにウンと言いなよ」

小元「ソレ計りはどうぞ」(立たんとする)

加藤「ヤイ、小元手前此加藤を見損つたな、こうなりや可愛サ餘つて悪さが百倍だッ阿魔其ま、にやして置かないから覺悟しろ、よくも此加藤に耻撞したなッ

仙「若旦那ドウナスツタのでございます」

加「ツイ仙公ドウシテモ此阿魔己の手に乗らないや、モウ頭巾を脱ひだよ仕方がないから、之れから此女をよなぶつて、よなぶり抜いて夫れを肴に一杯呑ふよ」

仙「親分殿目がね、ツイアマー手前も余程目先の見ないあまアだな、此土地

ぢや親分の息がか、らなければ三日と居られないんだ、此八王子ぢや一と言つて二と降らない大親分だ、夫れを知らないで耻をか、せやがる大馬鹿者奴」

加「ヤイ小元此處へ来て酌をしろ」

小元「ドウか返して被下」

加「ニ返せ操しいやい、玉と祝儀を拂つて呼んで居るお客様だ、返しも返さぬも己れの了見だッ、生意氣言ふと腕骨打ち折るぞ」

(加藤吸物碗を小元に突出す)

加「之れで呑め、飲まぬと承知しないぞ」

小元「旦那ドウッ勘忍なすつてお呉んなさい」

加「己れのさした盃受けられないか」

小元「受けない譯であります、ソナナ大きなものでは」

加「これ程言つても、ヨシ呑まなければアコウシテヤル」

(頭から酒をかける、小元逃げる此時お玉登場)

(仙公と共にさるお玉飛び出す兩人をどめ)

王「旦那何にをなさるんです、線香はお願して小元さんの身体は賣りませんよ、我でも有つたらドウなさるんです、此家で迷惑します大概にして被下」

加藤「ヨシ手前迄が生意氣な、今に覺ひて居ろ」(退場)

小元 姉さんドウも有難ふ、お蔭で助かりました」

お玉 トンデモナイ目に遭ひまして、お氣の毒樹ねー私しホントウに顔に障て、男だを毆打てやるに」

小元 此土地の若旦那だと思つたら遊人の親分ですつて、ホントウに驚ひて仕舞つてよ、夫れも可いが頭から着物迄お酒浸し」

玉 デモお前さんまた、幸よ彼の男の言ふ事を聴いたら最後、散々遊ばれた揚句が果は手切金と轉ぶ、手の附けられない、お前さん諾んと言はない丈けドンナに宜かつたか知れやしないの、此の邊の藝者は皆一度は引懸つて、ヒドエ目に逢ふのよ」

小元 私し藝妓なんて此様な辛い者なら死んだ方がよくてよ」

(此時系宗登場)

玉 フヤ、貴方系宗の旦那何にかご用」

系 イヤ小元さん座敷は茲處か、今大變な相談を聞いたから、來たのだがお前小元さんかい」

小元 ハイ私しでございますが」

系 ソウカイ可愛想に女をつかまいて無法な事をする男だ、實は門前で今の奴等

和女の歸りを待伏て途中から引續て行つて、強姦でもするか夫れども外へて、

連れて行こか様な相談して居たが、何んても無事ぢや済むまい」

小元 エッ旦那、私しやさうじたら宜いでせう」

玉 ホントウニ小元さん可哀想だ、旦那東京なら小元さんも東京の人、ドウか旦那助けて上げて下さい」

小元 助けて上げたいと思ふんだが處でドウすればヨイんだ子」

系 ハイ、私しに別に考ひも有りませんが主人の借金を返して」

小元 借金は幾等有る子」

系 五十圓借りたのですが八圓ごか申します」

小元 何だ八十圓計りか、ヨシ私しが引受た八王子の生系商系宗だ、明日中に金を持て來て遣るから東京へお歸り、私しも時々東京へ行くから其時返して貰ふよ

お玉 私しもソレデ安心しました、私し今晚歸らすにお泊り」

系 ソウしたらよからう、ぢや私しは歸るから明日吃度金は届けて上るよ」

小元 有難ふございます」

(頭を下げる木)

ツナギ 厚木 街道

明きから舞台一面の山道、立木あり山道夜さむしこなしの仕出し遣入る

加藤に兒分仙太外三名馳出し忍び込む

花道より二台の車、先に系宗次に小元本舞台にかゝる、兒分出で提灯を消す、車

や、糸宗小元を車より引落す、仙太は小元、加藤は糸宗

車屋「何を仕るんだい、巫戯たまねをするな」

仙「ヤイ手前等に用はない二人に用が有るんだ、忠義立てしてつまらない真似す

こる活かしちや置かないぞ」

加「ヤイ宗三郎、汝は能くも己れの仕事の邪魔したな、青二才奴、手前の様な青

二才に邪魔されて黙つて居られるかい」

糸「他人に邪魔なぞした事は有りません、大方人違てせう」

加「馬鹿ぬかせ、余計な文句を並へるな、斯の女渡して仕舞ひ」

糸「女と言ふのは小元の事ですか、此小元なら盗んで来たのぢや有りません、立

派に佐野屋へ借金拂つて連れて来たので貴方にはお渡しが出来ません」

仙「此女は此方に用の有る女だ、八王子へ引返して呉んねー」

糸「夫れは不可ません、是から横濱へ出て東京へ行くのです、お渡しする際には

断じて出来ません」

加「牛氣意なた、んで仕舞ひ」

軍房花道へ逃げる、あゝ立廻り小元土手下に落ちる、糸宗結局山中に逃げる

小元土手下の下に居たのを一人見附る、引張り上げる、猿口輪をかける處へ車夫の案

内へで巡査二人馳け出し小元息を吹き返す

(木)

祝小ざむら團子

北

初代 金庫 小紫

越

小太夫 若紫 初鷹

菊世 信夫 越路

樓

錦紫 桃代

次三與目夏

番一六二話電

や驚く、糸宗小元を車より引落す、仙太は小元、加藤は糸宗
 車屋「何を仕るんだい、巫戯たまねをするな」
 仙「ヤイ手前等に用はない二人に用が有るんだ、忠義立てしてつまらない眞似す
 ざる活かしちや置かないぞ」
 加「ヤイ宗三郎、汝は能くも己れの仕事の邪魔したな、青二才奴、手前の様な青
 一才に邪魔されて黙つて居られるかい」
 糸「他人に邪魔なぞした事は有りません、大方人違てせう」
 加「馬鹿ぬかせ、余計な文句を並へるな、斯の女渡して仕舞ひ」
 糸「女と言ふのは小元の事ですか、此小元なら盗んで来たのぢや有りません、立
 派に佐野屋へ借金拂つて連れて来たので貴方にはお渡しが出来ません」
 仙「此女は比方に用の有る女だ、八王子へ引返して呉んねー」
 糸「夫れは不可ません、是から横濱へ出て東京へ行くのです、お渡しする際には
 斷じて出来ません」
 加「牛氣意なだ、んで仕舞ひ」
 車屋「花道へ逃げる、あゝ立廻り小元土手下に落ちる 糸宗結局山中に逃げる
 小元土手下の下に居たのを一人見附る、引張り上げる、猿口輪をかける處へ車夫の案
 内て巡査二人馳け出し小元息を吹き返す」

(木)

子團らくさ小

廓遊敷座貸

功成子團らくさ小祝

改樓港青元

店支本樓谷高

若葉	信夫	玉吉	高鶴	かしく
高助	末吉	若高	高吉	花吉

旭町

電話 二三一番

子らくさ小

和洋 御料理

濱町

坂井家

電話 二三三

柳吉	玉子	春吉	幸吉	松助	小まつ	市松	一助	梅香
小きん	京子	小時	つばめ	美代吉	なや子	小奴	かの子	茂々子
金太	みよし	半玉	二三子	チビ助	秀子	おてふ	いろは	ふじ子

青森見番藝妓

電話 五四八

和洋

御料理

濱町

金森樓

電話一〇五

青森藝妓申込所

電話三三九

末吉千成	小かね愛子	榮吉五郎	小菊萬歳	静香お経	小游てる子	三勝島子	お太福節子
幸之助	權八	あや子	たしく	牛玉	鳳子	桃太郎	

五 慕 佛國巴里德谷の下宿屋
 返 し 佛國公使館菱田扣室

- 一 須木書記館
- 一 菱田夫人榮子
- 一 公使館員二名
- 一 徳谷盛之助
- 一 書記官一名
- 一 外國人一名

(明き榮子夫人盛之助板附にて明く)
 榮子「茲處かね、大層宜い下宿たね之れで賄持つて一ヶ月何弗取るねー」
 徳「ハイ何に至つて廉いですが、貳拾五弗程です」
 榮子「大層高ひね、留學生が二拾五弗の下宿料はぜいたくか過ぎませんか」
 徳「ナニニ祖母さん私しも日本の留學生です、殊に公使に勤てすあまり安すい事は出来ませんよ」
 榮子「時々羨しも氣散じに遊びに来ますか、大層静かでよいねー」
 徳「秘密の會合などには持て来ひです、叔母さんから下宿料を拂つて頂戴するのてすから、殊に斯様な處を選びましたのでハ……」

返 五

し 慕

佛國巴里德谷の下宿屋
佛國公使館菱田扣室

- 一 菱田 一 須木 一 菱田 一 須木 一 菱田 一 須木
- 一 菱田 一 須木 一 菱田 一 須木 一 菱田 一 須木
- 一 菱田 一 須木 一 菱田 一 須木 一 菱田 一 須木
- 一 菱田 一 須木 一 菱田 一 須木 一 菱田 一 須木

(明き榮子夫人と盛之助板附にて明く)
 榮子「茲處かね、大層宜い下宿たね之れて賄持つて一ヶ月何弗取るねー」
 盛「ハイ何に至つて廉いですが、貳拾五弗程です」
 榮子「アヤ大層高ひね、留學生が二拾五弗の下宿料はぜいたくか過ぎませんか」
 盛「ナーニ祖母さん私しも日本の留學生です、殊に公使に甥てすあまり安すい事は出来ませんよ」
 榮子「時々羨しも氣散じに遊びに來ますか、大層靜かでよいねー」
 盛「秘密の會合などには持て來ひです、叔母さんから下宿料を拂つて頂戴するのですから、殊に斯様な處を選びましたのでハ……」

「エッお前何にお言いたい」

「エヤ奴母さん御心配はイラランドスヨ、御安神なさい人間は誰れにも秘密の慰
籍か有るてすよ、僕は口外する様な事はしません、御安神なさい……時に叔母
さん内地で開くとお光が下谷で藝者をして小もど、言つて、非常に賣出して居
ると言ひますか、何んて洋行して英國へ行つてます、磯部清一郎君が松源で卒
業生の送別會の折逢つたが、熱絶する程おみちは驚いたソウデス」

「アおみちが小元と言ふ藝妓になつて居るつて、マーンソナニナツテ可愛想
に磯部さんの奥様になれたものを、誰れかアソナ罪を造つたのだから、ドレ程に
惜しいたらうチ」

「トウも仕方ないものですね……アツ伯母さん一寸僕買物か有りますから直
く來ます、待つて居て下さい」

「ハイ早くお歸りよ」

（徳谷笑を殘してマアごゆくり）
「アカシイチエ、盛之助が變な事計り殊に依つたら妾と須木さんの仲をすつて
居るけはあるまいかマサカソナ事もあるまいが」
（此時須木登場）
「アヤ奥様此處へですか、徳谷君は何處へ」

「アヤ須木さんドウシテ貴方が茲處へ、妾の居る事を承知してお出になつたの」
「エ、存ちません、徳谷君が何事か至急に相談か有るとのお使て有りましたの
て急ひて來たので」
（愛子笑を含んで）

「ハ……夫れては今に戻りませう、少しお待ちなさい」

「夫れてはお歸り迄待ちますかね」
「徳谷も察しか宜いから直くは戻りますまい、館の方に用かなければ御緩りな
さい」

「エツ、テは徳谷君は御存ぢてすか」

「ドウモすつて居る様ですよ」
「ソリヤ困りマシタナ、此の事か發覺した、噫は實に申譯のない事か出來上り
ますか」

「心配しなざるな盛之助は私しの甥てすよ、安心してお出なさい、茲處なら窓
と窓と見られる心配はなし、傍りに人家か少ないから之れから茲處でいろく
御相談する事に仕ませう」

「ハイトウく徳谷君にすれましたな」
「アナイニ貴方ソナ氣の小さい事では仕ようか有りませんよ、心配しなざるな

モ (此時下宿屋主人モルライト登場)
モ ヒシダ奥様、電話旦那様直歸れ言ふて来ました」
モ ハイ直ぐ返りますと言つて下さい」

須 (主人退場)

須 旦那から電話ですか、チアお歸りなすつて下さい」
榮 テハ私しは歸りますから、後てヨク盛之助に話してお出よ」

須 (夫人退場)

須 「奥さんと僕との仲が徳谷君にすれちや油断が出来ないが、徳谷君も随分皮肉な解遇をさすものだね」 (トアノ蔭より)

徳 「皮肉ぢやないよ、心配したまふな、僕は君等の出雲の神さまだい、……」

須 「イヤ御寒錢次第でマダくご利やくがあるぞハ、……」

徳 「イヤトンダ失禮したよ、然しドウモ驚ひた子」

須 「御心配し給ふな、僕が決して口外せんさ」

徳 「時に用件とは」

須 「お察しか悪いね、僕の銘案で今日も満足してしたるー」
「イヤ實に人が悪いね」

徳 「時に君、ドウた子此頃は君の財政は、少しご助力を仰きたい子食生の爲に」
須 「イヤお蔭で千五百圓の年俸に海外滞在手當が千五百圓何んだ彼だつて五千圓程戴ける譯さ」

徳 「五千圓フムイヤ實羨む可したね」

須 「時に君は醫科だが、醫者より君なごは外交官になつたらドウダ子、先達でも御前が君の事を外交官に仕度い、僕でも卒て居なかつたら君を僕の代理に使ふのだなんて言はれたよ」

須 「ナニ君が居らなかつたら僕が代理だつて矢張り五千圓の金に有りつくのだつた子」

徳 「マソウユウ譯た子」

須 「フム」

徳 「イヤ非常に長居した、何れ其内相當にお禮をする何分共に秘密に頼みます」

須 「ソウカ子、マ宜ひぢやナイカ」

徳 「デモ又御前の用も有る事だて、何れ日曜ても緩つくり」

須 「ちや何事もせんねー、此れにおこりなく時々お出て下さい」

須 (兩人ハ……)

⊕ (徳谷一人になる腕組して黙考)

(ラム須木が居らなければ僕は五千圓の外交官になれるんだな……)
佛國公使館菱田扣室
(明き此處書類澤山積み重ね)
(館員一名板附にて聞く)

甲「時に君、僕等のやうな、つまらんものはないね一生懸命に働いて月給四十圓

乙「ソウタ其處へ行つちや須木さんた子、別に大した人物でもないか年に五六千圓は入る立派な高等官だ、或る者の効力は恐ろしいものだね」

甲「或る者とは何んたね」

乙「君はまだ知らんのかね、そらレコ(小指を出す)の關係を」

甲「をくさまッ」

乙「シツ靜かにしたまい、實は先の松本さんが何んの失敗もないのに國へ返して須木さんと呼ばれたのは皆奥様の御手腕さ」

甲「アム、すると余程前から關係が有つたのかね」

乙「余程様子が以前からのやうだね、何んても家政計りてない、己てが今の世は女天下たね」

甲「庶政の失敗も大方之れから起るからね」

乙「女と言ふ者は恐ろしい者たね」之より先き公使ドアの外にて話しを立聞くと怒心頭に達する有様ドアを開けて入る

甲「お歸りなさい」

乙「お歸りなさい」

菱「君等今日は休憩し給ひ」

甲「デモ、今遣り掛けました仕事がありますから」

菱「命令タツ」

(甲乙顔見合して勿々退場) (ドアの外にて宜しく聞かれたなの思入下手に退場)

菱「今聞き居ると實にけしからん、以前からドウモ變だとは思つて居たが實に須木の奴失敬な奴」

(机の上の手紙を見る「無名だな」讀んで煩悶の体)
(ベルを鳴らしてボーイを呼ぶ)
ボ「何あります」
菱「須木を呼べ」
ボ「ハイ」(様子に驚へて勿々退場)
(公使刀を見て椅子に掛ける 須木の出)

須「お呼で有りますか」

菱「掛る……書類を一札投げ附る」 (須木夫れを見て)

須「此書類はさうかしましたか」

菱「汝は之れで宜いと思つて交渉したか」

須「ハイ、公使の命令に基きて交渉を遂げましたので、別に手落ちはないかと存

菱「すませんが、夫れとも何にか手落ちが有りますか」

須「黙れ余はそんな命令は下さんぞ、此談判は本國政府の命に背ひた越權の所爲

菱「で要するに日本の國辱となるべきものだ、余の面前で男らしく切腹して其罪を

須「謝せ」 (刀を取つて突附ける)

菱「夫れは無法で有ります、私は公使の命令の外越權の交渉などは致した事は有

須「りません、孰れの点が國辱になりますか御説明を承はりました上、私の論し

菱「た理由を説明いたします」

須「子に説明せよ、ウム併し余の説明を聞いて初めて國辱なる事を悟る様な男で

菱「も有るまい、汝も男なら前非を悔ひて割腹して罪を謝せ」

須「私は果して國辱になります様な交渉致しましたら仰せを待たず切腹も致し

菱「ませう、此首も差上ませう、何卒一点の御説明を願ひます」

須「汝も學識他に勝れた男に似合んな、是程言ふたら己れの良心に答を促せ分ら

菱「んかく一國を代表する公使の威權落した姦天奴ツ」

須「エツ」

菱「謝罪をせんければ子が處分する」

須「(二刀の下に切殺す 公使椅子に腰掛る部員の出皆見て驚く)」

菱「其方等は何にも驚く事はない、須木は本國政府の訓電に依て交渉せしめた大

須「切なる外交の失敗に依り國辱に替いられぬから手討にした後の始末を致せ公然

菱「になく秘密にせよ」

須「(皆死骸を其ま、退場)

菱「榮子夫人「なんです、皆様、さうかしましたか」 (と登場)

須「(ドアを開け、見て驚く)

菱「榮子貴様之れを見て何んと思ふ」

須「貴様は本限り本國へ歸つて窮命しろ」

菱「ハイ」

須「(ドアの蔭にて徳谷驚く件) (木)

六まく
赤坂氷川町松永ちか子宅
ツナキ 忍池ちか子投身
一 秋岡看護婦
一 松永ちか子
一 山本篤親
一 箱やの三公
一 徳谷盛之助
一 全りの子
一 小元のお光

(明き李野子板附にて幕開く)

李 お母さんはドウナスターだろー、ホントニ心配だわ叔父さんは何んて母さん
のする事には反對なんだから、屹度御承知をして被下ないたるー、モシ此縁
談が整はない時は委しドウしやう、徳谷さんならホントウニ御立派だわ
(ソウく今日は徳谷さんお出になる筈だから、おつむりても仕て置かう奥へ
遣入る)

(花道より徳谷秋岡看護婦と登場)

徳 今日大抵決定てせうな

秋 今日決りますよ、貴方の希望で標緻は二の町だが、其の身体に附いて来る
一萬圓が貰ひ物ですからね

徳 ナンセお骨折てした、充分おん禮は致しますよ
秋 ナニセお母さんと娘さんが二人で洋行歸の醫學士と言ふので、大持ててすは
丸て夢中よ
徳 マートウカ宜ひ具合に行つて呉れるように願ますよ
秋 ご免なさい、李野子さんお出ですか
り ハイ何方です、フヤ秋岡さんサア何卒お上り被下
秋 ハイ、先生も御全行てお邪魔に來ました
り フヤマー先生も(恥かしいこなし)サアドウゾお上り被下ひ
(秋岡徳谷兩人上る)
徳 お母様はお出でございませうか、お見ひにならん様ですが
李 ハイアノ……叔父の處迄……
秋 ハ……縁談の相談で
李 ハイ……
徳 チアお母様が歸つた頃伺ませう、お合嬢お一人の處へ失禮ですから
秋 ハイ
李 エ……イ……アノ直ぐ歸りますて先程出ましたので、モウ歸る頃と思ひますが
秋 チヤ、お歸り迄お待ち仕せう、ドウセ又出直さんければならんだから二度

手間がかかりますよ。マ―徳谷先生あなたソチライ……マア並んで御遊遊せド
ンナにお似合なさるだろー……ホ、ホ、ホントウに李野子さんの丸鬚になすつた
處を早く見たいわ子……ホ、ホ、ホ、

李「アラ嫌な秋岡さん」(袖で打つこなし立つて奥へ逃げ込む)

ちか「(徳谷秋岡へ、ハ、ハ、ハ、と笑ふちか子の出)

李「今歸りました大層後くなつて、チャ秋岡さん……これは先生マ―ヨウお出
になりました事……チャ李野は何處へ行きましたら」(奥より李野の出)

李「アラお母さんお歸りなさい」

ちか「なんだのお前お客様を置放して、マア我儘なホントウに困りものだ子今に
先生の奥さんになつてそんな事では困ります子」

李「アラお母さんまで……知らないよ」

秋「御苦勞様アノ山本様のお宅へお出のソウデしたがお話しは」

ちか「ハイ……叔父は變な人間で色々申しましたが、兎に角今日の内に來て返事
をするソウデございます」

徳「ハ、ハ、ハ、今日中には決定をいたしますので、ソウデスカイヤ實は私も一日
も早く李野さんの様な人と家庭を作つて見たいと思つて居りますので、李野さ
んを妻と成し得れば財産も何にも望みませんのでハイ」

ちか「(此時李野隣室に立聞き嬉しい思ひ入り)
「私し共も貴方様の様なお方の許に差上りますのは此上もない仕合で叔父が何
んぞ申ししても差上る積りてございます」

秋岡「さうぞソウお願ひいたします、折角私しの骨折甲斐も有ると言ふものでござ
います」(此時車にて銀行重役山本篤親登場)

車夫「ご免なさい、旦那でございますが、奥様はお出て、ございますか」

ちか「チャ篤親かい、サードウゾ」(秋岡と徳谷マゴ)

徳「茲處に居つちや悪るいてせう一寸お座敷を借りまして」

ちか「デハ一寸ドウカ別室で」

秋岡「チャ先生此方へ」(と先に立つて上手へ行く令嬢李野子と逢ふりの子マツ
テ、逃げ込む)(ちか子一人になる)

山本「イヤ先程のお返事に来ました」(と上り込んで上手に座はる)

ちか「シテお前さんの考へは」

山本「ソウデスヨ、色々貴姉からお話も有りましたので、よく本人を調べるため
一寸或る方面を聞きました」

ちか「ドウデス、立派なものでせう」

山本「イヤ、姉様人物もたしかに醫學士で有つて洋行戻りて有る事も確かですが、

……ド！モ其人物としてハナニモりの子を貴婦の御話の様に懇望せんとまた立派な女を妻にする事が出来るだろーと思ふ、イヤ夫れはソレでもよいが、ドゥモ本人の性行に感心せん處が有る……殊に私しは大不賛成だ聞けば佛國公使に赴任された菱田さんの奥さんの甥だ言ふ事だ、ソレデ僕は尙更嫌だ、決然お断りなさい」

山本「ドウ言ふ譯てす御聞せを願ひます」

ちか「なんでも、私しは不同意です、理由は後で分ります」

山本「夫れでは最早お前の御意見は伺いません、只だ私共を困らせる計りてす、りのは私の娘でございます、私の量見次第にいたします」

山本「夫れはいけません、りのは姉さんの子に相違ありませんが、ソウ姉さんの自由になりますまい」

ちか「エ、いたす美事にいたします」

山本「ドウシテ姉さんは此縁談にソウカを入れるのですそれから私に分りません」

ちか「エ、此縁談に計り力を入れるのでは有りませんが、李野はモウ二十三になり

ます世間から何の彼の申されまます、死んだ夫に申譯はありませぬ」

山本「ハ、……姉さんのお意中は分りましたが此の縁談は御断りなさい、是程

申してお分りありませぬければ申上げますが李野の叔父の須木が佛國で死ん

だ事はお忘れ有りますまい」

ちか「夫れは覺れて居ります、妾の弟ですもの此秋か三年忌です」

山本「須木が佛國で死んだ事なき考ると……私は佛國に居つた學士は大嫌ぢや」

ちか「夫れはお前さんの感情だ」

山本「何んても、私しは不賛成ぢや、夫れ程此縁談を望むなら私しと縁を切れ、

一切私がかまはんど」

ちか「ハイ今日限り李野との縁を切つて被下、李野は私の娘です、私の自由にし

ます」

山本「平生のお伶俐にも似合はん、大方何かに迷つてお出になるでせう、お目の

醒める迄お自由になさい」(座を立て歸る)

(奥より秋岡と徳谷出る)

秋「山本さんはお歸りてすか」

徳「お話しはさうなりました」

ちか「山本はさう云ふ者か不賛成ですが、私しは縁を切つて先生に差上る事にし

ました」(此時李野立聞き嬉しき思入り)

徳「そうですか、さうして叔父さんけ不同意なのでせう」

ちか「多分一萬圓の金でも」

「今渡すのが惜しいのでせう、何にそんな金はいりませんよ、嫁入り仕度の
三百位の金は有りますから」(秋岡徳谷顔を見合せ呆れたこなし)
「折角ですが此縁談は叔父さんが不服ではお断りをいたします」(立ち上る)
「李野子隣室で泣き伏し」

忍池の夜景 (幕)

仕出し、あんまに職人のお可笑味有つて引込し後

(李野子登場)

縁談破談のため身投に來る、ポストに手紙を入れ後先見廻して飛込む
上手より藝妓小元に箱や與三公登場

小「オヤ與三公今の水音何んだらうねー變ぢやないかい今時分」

與「俺もソウ思ひましたよ、尙どしたら身投ぢやございませんかい鯉の飛んだの
には馬鹿に音が大きい御座んしよ」

小「アラ、厭だ氣味の悪い與三公身投だつたら如何仕様早くお巡査さんでも來
れば宜いねー」(小元水面を見て)

小「與三公身投だよ、如何しやうお前助けてお呉れよ」

與「いけませんよ、掛り合になるを面倒ですもの」

小「何んだい男の癖に意氣地なし奴、救助してお遣り女だつたらどうするぞ」

與「なる程、そなた女なら見殺しにや出來ないわい」

(三味線渡して裸で飛込む 小元細帯を投げ與三公夫れにつかまり引き揚げ
介抱する 花道より山本登場之の始末を見て共に介抱する提灯で李野の顔
見て驚く)

山本「りの」

小「叔父さん」

山本「オヤ、旦那」

與三公「車夫イヤア、宜しくお可笑味有つて」(幕)

小「なんでナニに僕が少しも知らないよ」

「お話しを聞いたの一万圓の持参金の的かはづれたので、縁談を断るなんて、口車で今度は妾しを乗せ様と言ふんでせうソウハ行きませんわ」

徳「イヤなんだ失敗さ、お前か助けたのか、そうかぢや何にも隠しても仕儀かないから話しをするか、斯う言ふ譯さ僕も洋行迄して戻つて来て副院長位でもつまらんから一とつ病院でも建て様と思つて見たか金か無いから少々御面想は二の町でも一万圓の持参金か有るたる一と言ので、掛つて見たか金は一文にもならぬアンナ者を押し附られつや大變だから何んとか文句を附けて断つた譯さ宜ひ事が無くて困るよ、僕か富山生れ丈けに兎角仕事か越中と来るから子ハ、

小「デモ此頃は大層お立派な奥様をお持ちなソウで結構ですよ」

徳「ライ戯談ぢやないよ、埼玉邊の百姓を賣はアレも斯う言ふ譯さ、お前と今の叔母の處で逢つてから一日でもお前に逢はぬと氣か濟まぬので、遊びに来る金か入る病院の金も使込む實は首を切られる様な羽目になつて、實は三千圓計りの仕度金附きと言ふので貰つたのがねー、ナニこれもモ一服か切れて居る

「なんでナニが少しも知らないよ」
 「ほけだつて駄目よ、李野子さんを助けたのは妾しよ、チャント山本さんか
 らお話しを聞いたの一万圓の持参金の的かはづれたので、縁談を断るなんて、
 ノ口車で今度は妾しを乗せ様と言ふんてせうソウハ行きませんわ」
 「イヤなんだ失敗さ、お前か助けたのか、そうかぢや何にも隠しても仕儀かな
 いから話しをするか、斯う言ふ譯も洋行迄して戻つて来て副院長位でも
 つまらんから一とつ病院でも建て様と思つて見たか金が無いから少々御面想は
 二の町でも一万圓の持参金か有るたろーと言ので、掛つて見たか金は一文にも
 ならぬアンナ者を押し附られつや大變だから何んか文句を附けて断つた譯さ
 宜ひ申か無くて困るよ、僕か富山生れ丈けに兎角仕事か越中と来るから子ハ、
 、、」
 小「デモ此は大局お立派な御機をお持ちなソウで結構ですよ」
 徳「ヲイ戯談ぢやないよ、埼玉邊の百姓を實はアレも斯う言ふ譯さ、お前と今の
 叔母の處で違つてから一日でもお前に逢はぬと氣か濟まぬので、遊びに来る金
 か入る病院の金も使込む實は首を切られる様な羽目になつて、實は三千圓計り
 の仕度金附きと言ふので貰つたのがねー、ナニこれもモ一脈か切れて居る
 のさ」

陸奥日報 祝小とくら團子

福太樓

- 福壽 福竹 小福 福の助
- 福美 福悦 福元 久吉
- 京子 福太

八木 福太郎

電話 五五三

小 さ く ら 園 子

新盛樓

青森市新遊廊

新盛 大和 福山 小蝶

樓主 翁堀内新太郎

大佳樓

香取 三笠 敷島 春日 出雲

新遊廊 澤田ナヨ

小 さ く ら 園 子

御料理

濱町 若松家
電話四四一

和洋御料理

濱町郵便局横
柳川なべ
柳川
電話五三五

和洋御料理

濱町二丁目
喜久水
電話四二五

小倉するこ

浮世ぞうに

やぶ種物そば

新式鍋類

外御好に應ず

濱町二丁目棧橋通

万梅
電話(架設中)

御料理

浪花家

濱町

電話五〇一

和洋御料理

濱町六丁目

越後家

電話二四九

和洋御料理

濱町

松葉家

電話五〇

西洋御料理

玉突場の設備あり

濱町棧橋通り

高砂

電話六〇二

小「マーナント言ふ薄情なんでせう、可愛想に」

徳「之れも、皆お前のためさ之れ程の僕の思ひを買つて、僕の相談に乗つて呉給てもよいぢやないか、幾等小元は男嫌ひで曾出たつて以前の友人ぢやないか」

小「御親切は有難ふ御座いますか、實は私したつて人間ですもの人様の親切位はよく分つて居ますか、女の意地を立て過ぎる譯か有りますの……實は私に子供か有るんですよ」

徳「ソレぢや、何にも男嫌も何にも有つた者でないさ」

小「處か夫れには色々譯の有る事て、貴方もご存知でいらつしやる、御前様のお屋敷に奉公中奥様のお世話で御前様へ御用事になりましたの子……夫れかあなた内祝言と言ふ、旦那様のお立ちになります三月の月には、私しはあなた四月の身持なのですの、ソレか貴方眞面目で人様に話しが出来ない相手か分らないぢや有りませんか……コンナ事今更にお可笑で嘘の標ですか、まさか知らないで子供の出来る由もなしさと言つてホントうに男なごのしらない時分てす夫れからお屋敷は不首尾で下る、御前は破談になる、子供は生れる、ホントウにこんな身体になる迄色々言ひましたよ」

徳「フム、子供か生れたかねー」
小「イー生れまして貴方モ一悶ッでしよ夫れですから妾しは其の子供が出来た相」

小 さ く ら 子 (老)

「マーナント言ふ薄情なんせう、可愛想に」

徳「之れも、皆お前のためさ之れ程の僕の思ひを買つて、僕の相談に乗つて呉けてもよいぢやないか、幾等小元は男嫌ひで賣出たつて以前の友人ぢやないか乎」
小「御親切は有難ふ御座いますか、實は私したつて人間てすもの人様の親切位はよく分つて居ますか、女の意地を立て通す深い譯か有りますの……實は私しに子供か有るんですよ」

徳「ソレぢや、何にも男嫌も何にも有つた者でないさ」

小「處か夫れには色々譯の有る事て、貴方もご存知でいらつしやる、御前様のお屋敷に奉公中奥様のお世話で磯部様へ縁附く事になりましたの子……夫れかあなた内祝言と言ふ、旦那様のお立ちになります三月の月には、私しはあなた四月の身持なのですの、ソレか貴方眞面目で人様に話しの出来ない相手か分らないぢや有りませんか……コンナ事今更らお可笑様で嘘の撥てすか、まさか知らないで子供の出来る由縁もなしさと言つてホントうに男なごのしらない時分てす夫れからお屋敷は不首尾で下る、縁談は破談になる、子供は生れる、ホントウにこんな身体になる迄色々難儀をしましたよ」

徳「フム、子供か生れたかね」

小「イー生れまして貴方モ一四ツでしよ夫れですから妾しは其の子供が出来た相

手はねー悪いなからも夫だと思つて居るので御座いますよ、ですからどうか妾
しは何時か一度其夫の知れる時迄養者をして居様と思ひますよ、養者をいたし
て居ります内は御最負に願ひますよ」

「イヤ分つた實に感心な者た、叔母の處に居る内懐胎した其子供の父を天の許
した夫と思つて居ると言ふのたねー、如何にも感心た……、お前はホントウに
其時の夫に貞節を立て居るかねー」

小「貞節なんて、分りませんが心の中にはそう極めて居ります」
德「チャお光ソノ時の相手か僕だつたら如何するチー」
小「エッ、貴郎ッ」(眼の色更いて進み寄りかゝる)

小「万一僕たつたら」
小「ハイ……天然自然に許されました夫で御座います」
德「(エハツム息を殺して言ふ)
「ぢや其事實を打明けけるか、其時の相手は私だッ、驚ひたか愕りするなよ」
小「エ、虚て御座ます何んて貴郎かソナ、夫れども何にか證據を有つて御座
いますか」

小「別に證據はないか常人の自白か何よりの證據ではないか」
德「(サレ程ねー、デハ其時のお話を伺ませり) (小允詰る)

小「(徳谷之れより二幕目お光の部屋場の模様を物語る)
夫れて、疑が、はれましたデは是れから改めて貴郎と立派に結婚いたしま
う就ては……御願が有ります」

德「出来る事なりや何んても」
小「何に至難しくはないの、本式なら九段目のないしでせうが、まさか白木の三
寶で徳谷醫學士の散髪首を貰ひたいとは言ひませんよ」

德「マーソナ號外や附録は抜きにして早くお話しよ」
小「では申しますか、今仰つた私に麻酔劑を飲まして天から許されて結婚した
と言ふ一伍一什を私しと貴方と二人で麻市の奥様の處へ行つてお話しを願
ソウすれば奥様の御胸も解けて心宜く結婚を御許しくださると存じます」

德「ソレハ聊か迷惑しますな」
小「ソレか出来なれば、私は結婚は出来ませぬ」

德「ヨシ、じや宜ろしい苦痛を忍んで話します事に仕様」
小「夫れさい御承知なら私も安心しました、其場て直ぐ夫婦の盃いただきます就
ぢや私も紋附を着て行きますから貴郎も上等の御紋附で袴をつけておいてな
ねな……」

德「萬々承知した、ぢや明日の午后に仕様……ロツト、何時かよから一午後二

小「時にして呉れ僕か迎ひに行くから待つて居つて呉れ」

小「承知しました、ちや之れて失禮 仕ます」

（挨拶して立上り障子の外無念の思入り、短刀を帯の間から出して泣き上る
處へ箱屋の與三公ズカリ来て）

與「姉さんお迎ひ」

（小元短刀隠す）（木）何気なき風にて幕

小 元 宅 の 決 心

小元「父の作造板附にて幕開く」

小「ナンタツテ大層早く迎ひに寄越したんだい」

小「父さん、大變な事か分りましたの」

小「なんだつて大變な事とは」

小「外でないか花子の父か分りました」

作「ナニ相手か識れたのか、誰れた何處の何奴た、畜生お前の生世の邪魔をしぬ
早く開かせろ、早く言ひ相手は誰れてもお前をこんな難儀をさせやかの
た奴だ已れか恨み齊して遣るサア誰れた」

小「ソウ怒つても駄目だよ、父さん實はその人に昨夜逢つたか今日家へ来て實は
夫婦になると偽して來ました、之れから菱田様の奥様の處へ隠れ出して立腹

は

「方りを見廻はして」仇を打つ積りお父さんにも長い間世話になつて居たが、
心配を掛けて濟まないが、さうか之れかお分れたと思つて下さい」

作「なんだ、お前が仇を打つ、ソイツは悪い、お前は之れから生い先きの長ひ身
体た年は取つても作造た、庭の松の枝切るより譯のない事だ、已れがやろ」

サア相手は誰れた」

小「お父さんソウ腹を立て、仕舞てはいけないよ」

作「畜生之れが腹立つに居られるかい、散々人に難儀を掛けやがつて、サア腹た

く、承知が出来子」

小「困る子お父さん、實は其相手はねー（と昨夜の徳谷の事を話する）

から實は」（と父の耳に口寄せてささやく）

作「フム、さうかぢやお前の様に遣るさ其變りお前が失敗つたら自己は吃度違つ

て見せる、お前も作造の娘だ、シツカリ遣れ」

小「アイヨ」

（之れにて下女おなへ酒樽持つて下手より出）

小「ナヤ、さうかい御苦勞、此方へ持つてお出、お父さんと呑むんだから」

作「さうだ、分れの盃だ」

小「分……分……ワカ……ワカイ者のお酌で呑むんたい、あねやお酌しろ」
なへ「おら、お酌の仕様たら知らねーだ、姉様についで貰はつせり」
小「盃を
け出す」

小「ハ……ホントウにお前氣樂たねー」
なへ「ア……ア……喜樂さ御敷座たつて」

小「アハ……呑氣たねー」
なへ「ナンタベ、俺等呑む氣なんぞないだぞ」

小「アハ、……爺さん之れが一番罪かなくつて宜いねー、マ……マ……イエから台所へ行
つてお出で」(後兩人無言で涙の別盃を交す)
作「シツカリ遣つて呉れ」

(之れにて徳谷登場イッくシテ)

徳「お光居るか子」(と仲に入る、お光父を隠す)

小「ヲヤ、貴郎大層早い事ねー、二時の約束でしたに」

光「イヤ心が急いで、大急ぎで来たさ早く仕度して行かふぢやないか」

小元「ぢや私し仕度しますから一寸何か其内ビールでも取りませうぢや、マ……マ……」

小元「ア……なんだハ……」

徳「ナンタチ、立つたま、座てあ……あ……」

小元「ホントウ、無調法者で」
なへ「ナンタベ山出したなんて、山出してないだ俺等房洲だから、海出した」

小元「ハ……仕様がなね、お前ビールを持って来てお客さまに上るたよ」
なへ「ハイ台所へ遣入る」

徳「ホンどう、面白ひ女中さんたねー」
小元「アレニ係つて年中笑つて居ますよ」

なへ「ハイ持つて来ました」
小元「お前お酌をして上るんてすよ……ては且那一寸失禮して仕度します」

(お光退場)
徳「徳谷おなへと可笑味有る處へお光来る」

小元「お待遠サア出掛ませう」
徳「ソウカ、じや出掛様」(表に出る)

なへ「早く返つて来らしやいよ」
小元「思はず涙になる二人引込」

(作造出刃庖丁を持って出て来る)

(なべ驚く)

(木の頭)

仙台坂榮子夫人宅

(榮子居間、榮子、徳谷、小元三人板付にて幕開く)

榮子「お見ひとなると言ふお手紙でしたか、大層おめかして二人で何處かへ行つたのですか」

徳「イヤソウじゃないです、實は叔母さん貴方の前で二人で結婚の事を仕にさしりました」

榮「エツ、ナンデステ結婚の、マ一盃如何言ふ譯です」

徳「事情を語る」

「ソウ言ふ譯で今日おみつの言ふまま、恥を忍んで叔母さんに打明けて御許しを得て、盃を仕様言ふ考ひ」

榮「マ一、ほんとうにお前の亂擗にも呆れますね、出来た事だから仕方ありぬんかそれでお光は承知かい」

お光「……」

徳「お光は承知ですとも、お光が勤めて来た様な次第で」

榮「……」

光「徳谷盛之助祝言の盃せよとは聞くも汚ららしい、此身を疵者にして今日迄苦しめられた恨みの刃受けて見ろ」

作「ヲ、遣つたか、來出かしたく」と褒める

巡査「お光がつかりする處へ巡查來る」

お光「オイ、お前現行犯者だなッ」

作造「ハイ、立派にお細を頂戴いたします」

作造「お光つまらない真似するな」(と後に突きやり)

作造「且那此罪人は私して御座ます」

(と作造腹を切る)

(木)

(大團圓)

264

612

子 園 ら く さ 小

祝 陸 奥 日 報 主 催 小 櫻 團 子

青森市旭町

朝日座主任

出 間 貞 吉

一 力 櫻 樓

下北郡大湊港

出 間 寫 眞 部

出 間 貞 吉

祝 小 櫻 團 子 の 成 功

青 森 遊 廓

橋 本 櫻 樓

羽 越 若 掛 松 九
衣 路 鶴 橋 島 重

明治四十三年十一月廿日印刷
全 年 十 一 月 三 十 日 發 行

青森市大字濱町七十五番地主族

著 作 者 兼
發 行 者

藤 田 德 術

印 刷 所

陸 奥 日 報 印 刷 所

青森市大字長島

同 社
印 刷 者 嶋 海 助 六 郎

李錦記由流... 廣東... 廣州... 廣東... 廣州...

三番印裏地特約販賣

三河製綿特約販賣

青森市寺町

正札大五 談谷洋服店

電話四〇五番